

研究

親の育児感情に影響を及ぼす乳幼児の年齢別要因の検討

— PSI 概念モデルをもとにした児の年齢別比較 —

諏澤 宏恵¹⁾, 加藤 則子²⁾, 山田 和子³⁾

〔論文要旨〕

親の育児感情に影響する児の気質発達の特徴と、親の健康や育児環境との関連について探るために Parenting Stress Index (PSI) を参考に作成した質問紙調査を乳幼児を抱える親319名に実施し、児の年齢別に検討した。親の育児感情を従属変数とした場合の重回帰分析の結果、1.5~2.4歳児群では、新たな環境や人への適応のよさが親のよい育児感情に有意に影響していた。2.5~5歳児群では、親の育児能力、他の仕事の負担などによるゆとりのなさに加えて、児の機嫌が親の体調の悪さに影響しており、3歳前後の自我の発達がめざましい児への対処不能感が示された。これらの結果から、児の年齢では3歳前後の自我の拡大期が、親の健康面へ影響し親子関係を悪化させる可能性があり、乳児期にとどまらない親への健康支援と児の問題行動への支援を包括的に行う必要性が示唆された。

Key words : PSI, 児の気質, 育児感情

I. はじめに

近年、児童虐待や養育放棄といった育児をとりまく問題が顕在化する中、地域保健領域であっても、さまざまな予防的取り組みがなされている。特に乳幼児健康診査の場において、育児にまつわる親の感情についてのアンケートや問診票を作成し、きめ細かいスクリーニングを実施するなど、虐待の早期発見に努めている⁵⁾。

また、子ども側からみた虐待リスクとされる気質の特徴などについて概観すると、国内の児童養護施設の入所児童(3~7歳:被虐待児24%)を調査した研究結果³⁾においても、被虐待児は新奇場面や人に回避的であり慣れに時間を要する「適応」の悪さが指摘されている。

Thomas & Chess らの30年以上にわたる縦断

研究結果から子どもの気質と養育環境との「適合のよさ」は養育者の「期待や要請」が子どもの気質や能力などの特徴と相容れたときにみられるとされている。

したがって「育児」の周辺の問題を究明するには「母親の心理」、「乳幼児の問題」、「相互の関係性」についての検討が必要となる。

これらについて多角的に捉えようとするのが Abidin RR (1983)¹⁾ の開発した Parenting Stress Index (以下、PSI)²⁾である。

そこで、本研究では、PSIの育児ストレスモデル(図1)を参考に、結果としてのストレスではなく、児の気質発達の特徴や発育発達が、育児にまつわる親の感情についてどのように影響しているかという帰属要因について、児の年齢別に検討することにより、育児感情と向き合

Study of Factors Affecting Parenting Emotion according to Children's Age

[1802]

— Comparison among Children's Ages Based on the Conceptual Model of PSI —

受付 06. 1.23

Hiroe SUZAWA, Noriko KATO, Kazuko YAMADA

採用 07. 1.23

1) 国立保健医療科学院研究課程(保健師) 2) 国立保健医療科学院生涯保健部(小児科医師/研究職)

3) 和歌山県立医科大学保健看護学部(保健師/研究職)

別刷請求先: 諏澤宏恵 国立保健医療科学院研究課程 〒351-0197 埼玉県和光市南2-3-6

Tel : 048-458-6111 Fax : 048-458-6112

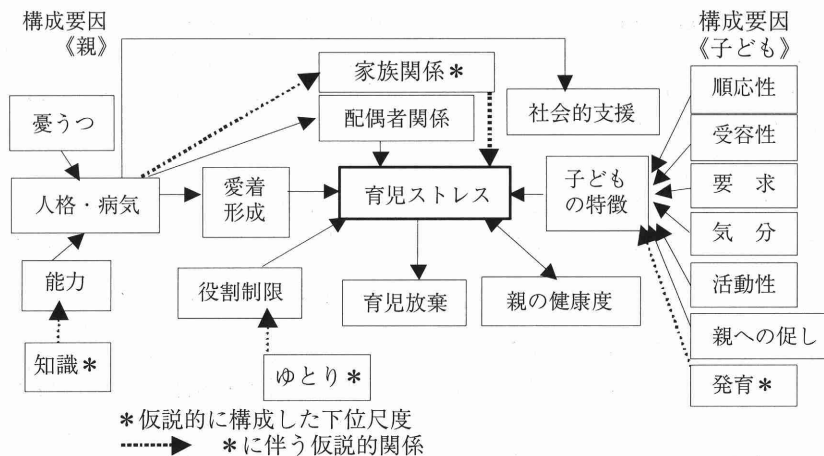


図1 PSI理論概念構成

う支援の実践に還元可能な理論的根拠を得ることを目的とする。

なお、プレテストの結果、回答率が30%以下と低く、PSIの質問項目は各年齢共通であるため、乳児などの月齢にそぐわないなどの回答者からの意見があったことから、各年齢発達に見合う質問項目に改変し、新たに尺度の開発を試みた。本調査は尺度開発に一義的な目的をおいておらず、上述した現状から二次的にアイテムの変更を余儀なくされたことを付け加える。

II. 方法と対象

1. 対象と期間

PSI理論構成^{注)}に沿って改変したオリジナルの無記名自記式質問紙調査を実施した。調査期間は平成16年11月～12月とした。回収率は57%で、回答に記入漏れなどの不備のあった3名を除く合計316名であった。

回答者の属性は関東地方W市育児支援センター利用者144名(45.6%)、M市育児支援センター利用者98名(31.0%)、と私立保育園利用者74名(23.4%)である。

続柄は、母親312名(98.7%)、父親4名(1.3%)であり、年齢は、10歳代1名(1.3%)、20歳代62名(19.6%)、30歳代230名(72.8%)、40歳

代23名(7.3%)。就労形態は、専業主婦215名(68.0%)、フルタイム就労67名(21.2%)、パートタイム就労19名(0.1%)、自営業12名(3.8%)。家族形態は核家族290名(91.8%)。児の属性は男児150名(47.5%)、女児160名(50.6%)、1歳未満60名(19.0%)、2歳未満84名(26.6%)、3歳未満98名(31.0%)、4歳未満53名(16.8%)、5歳未満21名(6.7%)、第1子224名(70.9%)、第2子80名(25.3%)、第3子12名(3.8%)であった。

今回は児の年齢別にみた発育的特徴との関係についての検討を研究目的としているため、居住区域(W市・M市)および帰属集団(育児支援センター・保育園)はデータを合併した。

2. 倫理的配慮

調査の趣旨を口頭で直接説明し同意を得た養育者に、調査票と返信用の封筒を手渡し、郵送により回収した。また調査票の表紙に調査者の氏名・連絡先・研究の趣旨および匿名性を確保する旨などを表記し、調査後、リーフレット配布を施設に設置し、広報的に結果のフィードバックを行った。

^{注)}育児ストレスを子どもの特性や親の心理社会的側面から多面的に把握するものであり、親子相互作用に関わるストレス因子など親子関係が投影される。日本版PSIは信頼性および妥当性が実証されている。PSIを構成する下位尺度は、A.子どもの特徴に関わるストレス6尺度47項目および、B.親自身に関わるストレス7尺度54項目の計78項目からなる。

3. 調査項目と下位尺度作成の手続き

調査項目は基本的属性（子どもの年齢、出生順位、既往歴、親の年齢、就労、世帯構成など）に加え、以下の尺度構成からなる。

PSI 理論構成の枠組みを参考にしたオリジナルの仮説的下位尺度を構成した。下位尺度作成の手続きは PSI¹⁾ の原本に準拠し、構成概念を踏襲した（図 1）。

全質問項目数は乳児（58項目）、幼児Ⅰ（59項目）、幼児Ⅱ（61項目）である。回答は、各項目 5 段階のリッカートスケールによる自己評価法である。

A. 子ども側の特徴に関わるストレス要因に「発育」にかかわる項目を、B. 親自身に関わるストレス要因に「家族との関係」、「ゆとり」、「知識」に関わる項目をそれぞれ仮説的に追加した。また、A. 子ども側の特徴は対象年齢別に、乳児（1.5歳未満）、幼児Ⅰ（1.5～2.4歳）、幼児Ⅱ（2.5～5歳）に分類し、「発育」や「活動性」、「順応性」に関する問いを、それぞれの年齢に見合った内容や表現に変えた。B. 親自身に関わる項目については各年齢群とも共通とした。使用した質問紙の種類は、Piaget⁹⁾による認知発達段階を参考として区分し分類した。それぞれ《乳児（1.5歳未満）》82名（25.9%）、《幼児Ⅰ（1.5～2.4歳）》112名（35.4%）、《幼児Ⅱ（2.5歳～5歳）》122名（38.6%）であった。

4. 尺度の項目分析

尺度の内的整合性を示す信頼性係数（ α 係数）は乳児（0.91）、幼児Ⅰ（0.86）、幼児Ⅱ（0.90）であった。因子分析後（プロマックス回転）の下位項目の α 係数は表 1 に示した。

5. 構成概念妥当性の検討

本調査オリジナル版質問紙（乳児用・幼児Ⅰ用・幼児Ⅱ用）の質問項目の因子構造を知るために、A. 子ども側の特徴に関わるストレス項目と、B. 親自身に関わるストレス項目について、それぞれ因子分析を行った。固定値 1 およびその減少率を基準に因子数を規定し、主因子法によるプロマックス回転を行い、各因子の上位 3 位までの因子負荷量の絶対値が 0.3 以上を示した項目を採択した。採択、命名した因子は

表 1 のとおりである。

また、下位尺度と総合計得点との相関係数は、乳児の「発育」を除くすべてにおいて有意（ $p < .05$ ）であった。

6. 統計解析

解析には SPSS11.0J for windows を用いた。

Ⅲ. 結果（図 2 および図 3）

PSI 概念モデル（図 1）をもとに、親の育児感情と各要因の関連をみた（図 2 および図 3）。

親自身についての設問から、育児感情を表現した「育児は楽しい」、「育児に自信がある」、「イライラしたり、憂うつや不安になることは少ない」、「体調がすぐれない」の 4 項目を従属変数とし、因子分析により抽出された児の特徴に関わる因子と親自身に関わる因子を独立変数とし、重回帰分析を行った。「イライラしたり憂うつや不安になることは少ない」は各年齢群ともに、そう・どちらかといえばそうの回答（乳 25%、幼Ⅰ 30%、幼Ⅱ 32%）より、違う・どちらかといえば違うの回答が多く（乳 42%、幼Ⅰ 35%、幼Ⅱ 40%）、ネガティブ感情表現の従属変数とした。

ステップワイズ法により、《乳児（1歳未満）》、《幼児Ⅰ（1.5～2.4歳）》、《幼児Ⅱ（2.5～5歳）》について各要因の分析をした。

- 1) 《乳児》では、「親の能力」が「育児は楽しい」（ $F(2,79)=18.48^{***}$ ）（ $\beta = .42^{**}$ ）と「体調がすぐれない」（ $F(1,80)=20.41^*$ ）（ $\beta = .45^{***}$ ）、「イライラ」（ $F(3,78)=31.58^{***}$ ）（ $\beta = .34^{***}$ ）の両価的方向に寄与した。親の要因では「親役割の規制」が「イライラ」（ $F(3,78)$ 、 $\beta = .21^*$ ）にのみ寄与し、自信につながるまでに至っていないことが分かった。
- 2) 《幼児Ⅰ》は「親の能力」は「イライラ」（ $F(3,118)=39.57^{***}$ ）（ $\beta = .30^{**}$ ）と「育児に自信がある」（ $F(3,108)=15.67^{***}$ ）（ $\beta = .372^{***}$ ）の相反する感情に寄与し、調査集団における親自身の育児能力評価の分散は大きいことが分かった。児の要因では「適応」（ $F(3,78)=15.67^{***}$ ）（ $\beta = .23^{**}$ ）が「育児は楽しい」に寄与した。

表1 因子分析結果と尺度平均得点

要 因	PSI 原版尺度	項目内容	第 1 因子	第 2 因子	第 3 因子	第 4 因子	第 5 因子	第 6 因子	共通性
① 乳 児 (子の項目)	M. 機嫌 0.857/8.65 (3.52)	思っていた以上には泣きはひどくない お腹痛など少なく機嫌は悪くない 他の子どもに比べて手がかららない なだめるとすぐに泣きやむ	0.97	-0.26	0.03	-0.04	0.00	0.80	0.80
	M016		0.77	0.01	0.03	0.05	0.06	0.68	
	M017		0.74	0.09	-0.01	-0.16	0.07	0.56	
	DE48		0.65	0.03	-0.02	0.03	0.04	0.47	
	AD40								
	R. 親を喜ばせる反応 0.686/3.61 (1.44)	だいたい期待どおりに育っていると思う この子のために何かをする時喜ばれていると感じる	0.15	0.74	0.18	-0.03	-0.12	-0.64	0.64
	RE14		0.11	0.59	-0.12	0.07	-0.15	-0.44	
	D. 発育 0.648/2.71 (1.11)	身長は順調に伸びている 体重は順調に増えている	0.03	0.05	0.79	-0.07	0.05	0.62	0.62
	RE13		0.05	-0.02	0.69	0.06	-0.11	0.52	0.52
	R'. 順応性 0.634/2.78 (1.13)	よく笑う あやしても表情が堅い*	0.14	0.03	0.04	0.75	0.05	0.71	0.43
AD33		-0.02	0.14	-0.17	0.47	0.23	0.43		
A. 適応 0.676/5.70 (2.30)	人に預けてもあまり泣かない 初めてのの人に会って落ち着かない*	0.07	-0.11	0.15	0.09	0.68	0.56	0.56	
AD39		0.07	-0.11	-0.07	-0.06	0.68	0.45	0.45	
累積寄与率=56.23			/因子寄与						
R. 親を喜ばせる反応 0.684/3.83 (1.14)	よく笑う スキンシップを喜ぶ 親を喜ばせる表情やしぐさをする	0.83	-0.03	0.03	-0.04	0.09	0.67	0.67	
AC27		0.69	0.03	-0.15	0.15	-0.09	0.51	0.51	
累積寄与率=56.23			/因子寄与						
D. 発育 0.614/2.84 (1.30)	身長は順調に伸びている 体重は順調に増えている	-0.15	0.80	-0.04	-0.04	0.09	0.63	0.63	
MO20		0.02	0.78	-0.15	0.04	0.04	0.55	0.55	
M. 機嫌 0.595/3.96 (1.65)	お腹痛など少なく機嫌は悪くない なだめるとすぐに泣きやむ	0.01	-0.10	0.69	0.02	0.25	0.46	0.46	
AD40		-0.03	0.02	0.66	-0.12	0.00	0.40	0.40	
H. 多動/衝動性 0.583/4.96 (1.89)	すぐに噛み付く・突き倒す・叩くことがある*	0.12	0.02	-0.38	0.84	0.07	0.56	0.56	
AD34		-0.04	-0.11	0.27	0.54	0.36	0.60	0.60	
MO49		-0.10	0.02	0.10	0.11	0.69	0.41	0.41	
AD31		0.05	0.03	0.31	0.03	0.50	0.29	0.29	
0.480/8.07 (2.20)	突然の予定変更を非常に嫌がる* 人にすぐに慣れる	0.23	0.03	0.21	-0.13	0.45	0.31	0.31	
累積寄与率=48.28			/因子寄与						
H. 多動/衝動性 0.613/8.00 (2.46)	落ち着かない* 小さなことにも腹をたてやすい*	0.67	0.22	-0.16	0.03	0.03	-0.08	0.54	
AD34		0.63	-0.08	-0.04	0.07	0.06	0.08	0.38	
AC25		0.48	0.30	-0.15	0.08	-0.05	0.00	0.35	
R. 親を喜ばせる反応 0.590/4.63 (1.50)	親を喜ばせる表情やしぐさをする スキンシップを喜ぶ この子のために何かをする時喜ばれていると感じる	0.12	0.59	-0.03	-0.13	-0.09	-0.10	0.37	
AC27		-0.08	0.53	0.15	0.02	0.11	-0.05	0.35	
RE14		0.04	0.52	0.09	-0.02	0.04	-0.01	0.33	
M. 機嫌 0.584/7.02 (2.32)	なだめるとすぐに泣きやむ 他の子どもに比べて手がからかない 目覚めは大体機嫌よい*	-0.14	0.05	0.66	0.24	-0.02	0.06	0.50	
MO17		0.07	0.17	0.65	-0.17	-0.20	0.02	0.49	
MO19		-0.16	-0.11	0.56	0.03	0.16	0.05	0.31	
D. 発育 0.809/2.83 (1.24)	身長は順調に伸びている 体重は順調に増えている	0.04	-0.07	0.05	0.87	-0.06	-0.09	0.80	
E. 期待 0.506/6.09 (2.40)	今までできていたことができなくなった* 新しいおもちゃで遊びはじめるのに時間がかかる* トイレトレーニングが困難、夜尿ある*	0.17	0.04	-0.04	0.00	0.64	0.06	0.50	
AD37		-0.16	0.30	-0.01	-0.01	0.47	0.12	0.35	
MO49		0.03	0.01	-0.04	0.03	0.42	0.01	0.18	
A. 適応 0.536/5.41 (1.90)	人にすぐに慣れる 親につきまとう、後追い*	-0.14	0.20	0.15	-0.06	-0.04	0.65	0.52	
0.536/5.41 (1.90)		0.23	-0.15	0.08	-0.04	0.01	0.59	0.41	
累積寄与率=52.22			/因子寄与						
MO49		2.98	2.47	2.79	1.98	1.80	1.40	1.40	

(注) 行左より要因下段は α 係数/平均値と標準偏差(カッコ内)。項目内容*は逆転項目、行右側の数値は因子負荷量を示す

要 因	PSI 原版尺度	項目内容	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子	共通性
① 乳 児	C. 能力 0.735/7.50 (2.43)	育児は上手くこなしている方だと思う 子どもが暴れると上手く対処できず責任を感じる* 知識とおりにいかないことでイライラする*	0.72 0.67 0.67	-0.12 0.05 0.18	0.07 -0.05 -0.30	-0.05 -0.02 0.15			0.48 0.60 0.45
	Fa. 愛情 0.811/2.79 (1.33)	子どもへの愛情は自然にでてる 出産後から月日がたつにつれて愛情が増している	-0.06 0.14	0.77 0.72	0.09 -0.18	-0.08 0.02			0.55 0.60
	S. 親役割の規制 0.644/10.80 (2.49)	生活の殆どを子どものために使っている* 出産後も自分のやりたいことができる 育児以外にも熱中する生きがいがある	-0.06 0.14 -0.04	-0.02 0.21 0.01	0.74 0.54 0.49	0.19 0.04 0.14			0.60 0.50 0.28
	F. 夫・家族 0.672/4.18 (1.76)	夫 (配偶者) は育児に協力的 夫 (配偶者) と育児についての意見は合う 累積寄与率=44.92	-0.10 0.10	0.07 -0.10	-0.06 -0.08	0.76 0.69			0.54 0.48
	C. 能力 0.778/5.45 (2.15)	親として罪悪感や申し訳なさを感じる* 子どもが暴れると上手く対処できず責任を感じる*	0.71 0.66	0.02 -0.02	-0.03 0.09	0.14 0.17			0.58 0.55
	S. 親役割の規制 0.769/10.47 (2.76)	生活の殆どを子どものために使っている* 出産後も自分のやりたいことができる 自分の時間や心のゆとりがある	0.06 0.02 -0.04	0.72 0.71 0.68	-0.16 0.21 0.12	0.02 -0.14 0.12			0.52 0.62 0.53
	F. 夫・家族 0.506/4.06 (1.56)	育児により自分も成長していると感じる 夫 (配偶者) は育児に協力的	-0.17 -0.31	0.15 0.02	0.55 0.52	-0.05 0.13			0.33 0.29
	I. 孤立 0.514/6.38 (2.57)	親同士の人間関係や付き合いが苦手である* 友人や相談相手がいらない* 友人と会っても楽しめない予感がある*	0.00 0.07 0.09	0.00 -0.04 0.09	0.02 0.04 -0.01	0.70 0.65 0.62			0.50 0.45 0.46
	S. 親役割の規制 0.784/10.15 (2.65)	子どもに振り回されて時間のゆとりがない* 自分の時間や心のゆとりがある 出産後も自分のやりたいことができる	0.78 0.77 0.72	-0.28 -0.11 0.02	0.19 -0.04 -0.14	0.01 0.17 0.00			0.54 0.58 0.48
	C. 能力 0.763/8.04 (2.49)	育児は上手くこなしている方だと思う 子どもが暴れると上手く対処できず責任を感じる* 知識とおりにいかないことでイライラする*	0.04 0.08 0.26	0.76 0.60 0.52	-0.08 0.17 -0.05	-0.03 -0.15 0.05			0.54 0.49 0.49
② 幼 児 I	U. ゆとり 0.633/4.81 (2.15)	仕事が大忙しで思うように育児ができない* 友人や相談相手がいらない* 家族の介護でこの子にまで手がまわらない*	-0.10 -0.11 -0.15	-0.05 0.13 -0.08	0.67 0.64 0.56	-0.10 0.33 0.11			0.36 0.72 0.29
	F. 夫・家族 0.633/7.18 (2.71)	夫 (配偶者) 以外に育児に協力してくれる人がある 夫 (配偶者) と育児についての意見は合う 夫 (配偶者) は育児に協力的 累積寄与率=44.67	0.03 0.02 0.13	-0.13 0.13 -0.08	0.03 -0.06 0.12	0.66 0.60 0.56			0.40 0.42 0.39
		累積寄与率=39.13	4.38	3.91	2.78	2.44			
	S. 親役割の規制 0.784/10.15 (2.65)	子どもに振り回されて時間のゆとりがない* 自分の時間や心のゆとりがある 出産後も自分のやりたいことができる	0.78 0.77 0.72	-0.28 -0.11 0.02	0.19 -0.04 -0.14	0.01 0.17 0.00			0.54 0.58 0.48
	C. 能力 0.763/8.04 (2.49)	育児は上手くこなしている方だと思う 子どもが暴れると上手く対処できず責任を感じる* 知識とおりにいかないことでイライラする*	0.04 0.08 0.26	0.76 0.60 0.52	-0.08 0.17 -0.05	-0.03 -0.15 0.05			0.54 0.49 0.49
	U. ゆとり 0.633/4.81 (2.15)	仕事が大忙しで思うように育児ができない* 友人や相談相手がいらない* 家族の介護でこの子にまで手がまわらない*	-0.10 -0.11 -0.15	-0.05 0.13 -0.08	0.67 0.64 0.56	-0.10 0.33 0.11			0.36 0.72 0.29
	F. 夫・家族 0.633/7.18 (2.71)	夫 (配偶者) 以外に育児に協力してくれる人がある 夫 (配偶者) と育児についての意見は合う 夫 (配偶者) は育児に協力的 累積寄与率=44.67	0.03 0.02 0.13	-0.13 0.13 -0.08	0.03 -0.06 0.12	0.66 0.60 0.56			0.40 0.42 0.39
		累積寄与率=39.13	4.38	3.91	2.78	2.44			
	S. 親役割の規制 0.784/10.15 (2.65)	子どもに振り回されて時間のゆとりがない* 自分の時間や心のゆとりがある 出産後も自分のやりたいことができる	0.78 0.77 0.72	-0.28 -0.11 0.02	0.19 -0.04 -0.14	0.01 0.17 0.00			0.54 0.58 0.48
	C. 能力 0.763/8.04 (2.49)	育児は上手くこなしている方だと思う 子どもが暴れると上手く対処できず責任を感じる* 知識とおりにいかないことでイライラする*	0.04 0.08 0.26	0.76 0.60 0.52	-0.08 0.17 -0.05	-0.03 -0.15 0.05			0.54 0.49 0.49
③ 幼 児 II	U. ゆとり 0.633/4.81 (2.15)	仕事が大忙しで思うように育児ができない* 友人や相談相手がいらない* 家族の介護でこの子にまで手がまわらない*	-0.10 -0.11 -0.15	-0.05 0.13 -0.08	0.67 0.64 0.56	-0.10 0.33 0.11			0.36 0.72 0.29
	F. 夫・家族 0.633/7.18 (2.71)	夫 (配偶者) 以外に育児に協力してくれる人がある 夫 (配偶者) と育児についての意見は合う 夫 (配偶者) は育児に協力的 累積寄与率=44.67	0.03 0.02 0.13	-0.13 0.13 -0.08	0.03 -0.06 0.12	0.66 0.60 0.56			0.40 0.42 0.39
		累積寄与率=39.13	4.38	3.91	2.78	2.44			
	S. 親役割の規制 0.784/10.15 (2.65)	子どもに振り回されて時間のゆとりがない* 自分の時間や心のゆとりがある 出産後も自分のやりたいことができる	0.78 0.77 0.72	-0.28 -0.11 0.02	0.19 -0.04 -0.14	0.01 0.17 0.00			0.54 0.58 0.48
	C. 能力 0.763/8.04 (2.49)	育児は上手くこなしている方だと思う 子どもが暴れると上手く対処できず責任を感じる* 知識とおりにいかないことでイライラする*	0.04 0.08 0.26	0.76 0.60 0.52	-0.08 0.17 -0.05	-0.03 -0.15 0.05			0.54 0.49 0.49
	U. ゆとり 0.633/4.81 (2.15)	仕事が大忙しで思うように育児ができない* 友人や相談相手がいらない* 家族の介護でこの子にまで手がまわらない*	-0.10 -0.11 -0.15	-0.05 0.13 -0.08	0.67 0.64 0.56	-0.10 0.33 0.11			0.36 0.72 0.29
	F. 夫・家族 0.633/7.18 (2.71)	夫 (配偶者) 以外に育児に協力してくれる人がある 夫 (配偶者) と育児についての意見は合う 夫 (配偶者) は育児に協力的 累積寄与率=44.67	0.03 0.02 0.13	-0.13 0.13 -0.08	0.03 -0.06 0.12	0.66 0.60 0.56			0.40 0.42 0.39
		累積寄与率=39.13	4.38	3.91	2.78	2.44			
	S. 親役割の規制 0.784/10.15 (2.65)	子どもに振り回されて時間のゆとりがない* 自分の時間や心のゆとりがある 出産後も自分のやりたいことができる	0.78 0.77 0.72	-0.28 -0.11 0.02	0.19 -0.04 -0.14	0.01 0.17 0.00			0.54 0.58 0.48
	C. 能力 0.763/8.04 (2.49)	育児は上手くこなしている方だと思う 子どもが暴れると上手く対処できず責任を感じる* 知識とおりにいかないことでイライラする*	0.04 0.08 0.26	0.76 0.60 0.52	-0.08 0.17 -0.05	-0.03 -0.15 0.05			0.54 0.49 0.49

注) 行左より要因下段は α 係数/平均値と標準偏差 (カッコ内)、項目内容*は逆転項目、行右側の数値は因子負荷量を示す

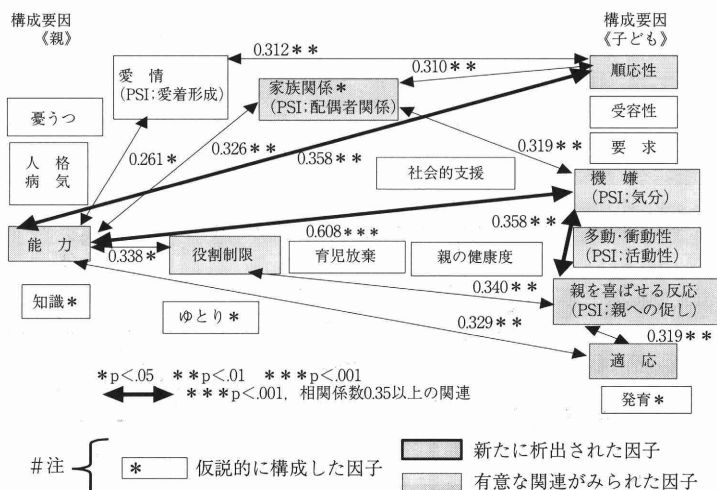


図2-1 《乳児》の因子間の相関パス

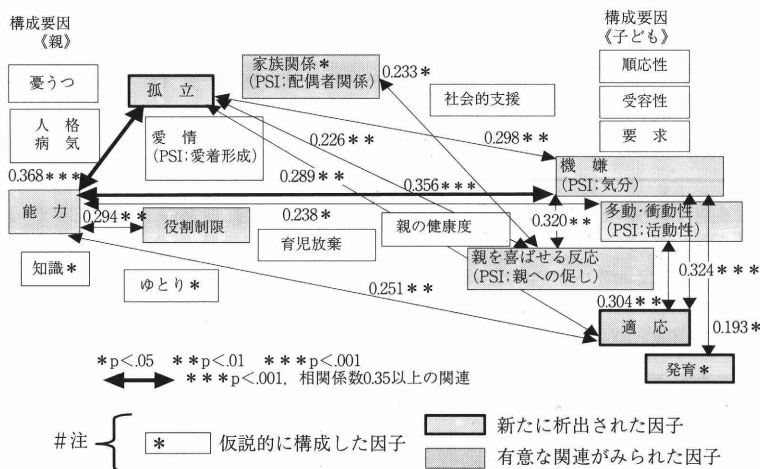


図2-2 《幼児I》の因子間の相関パス

- 3) 《幼児Ⅱ》では、児の要因と親自身の要因が育児感情に輻輳的に関わり、「イライラしたり憂うつや不安になることは少ない」($F(10,111)=12.45^{***}$)には、「親役割の規制」が中程度に寄与した($\beta = .517^{***}$)ことから、親の拘束感が強く、フラストレーションが募りやすい時期と考えられる。また、「体調がすぐれない」($F(3,118)=14.52^{***}$)について親の要因「能力」($\beta = .248^{**}$)、「ゆとり」($\beta = .312^{***}$)に加えて児の要因「機嫌」($\beta = .195^{*}$)が寄与していた。
- 4) 《幼児Ⅰ》《幼児Ⅱ》では「親役割の規制」($F(3,108)=15.67^{***}$)、($F(3,118)=29.98^{***}$)が「育児の自信」に影響していた。
- ($\beta = .212^{*}$)、($\beta = .184^{*}$)
- 5) 今回の仮説的設問項目である、「身長や体重の伸び」などに関する児の「発達」要因は全年齢を通じて構成要因として析出されたが「親のイライラ」や「育児の自信・楽しさ」を説明する要因としては寄与しなかった。
- 6) 全体を概観すると、《幼児Ⅱ》は従属変数を説明する有意な変数が多く、複雑な構図が示された。これを従属変数別にみると、「体調がすぐれない」では他年齢(1変数)に比べ、《幼児Ⅱ》では3変数と多くに寄与していた。

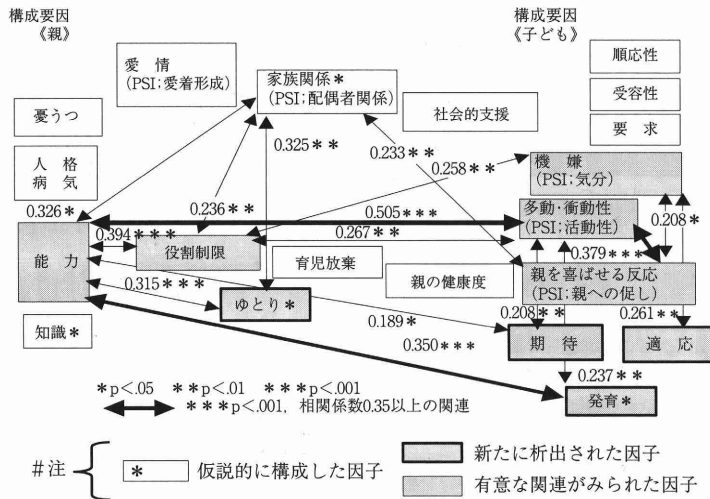


図 2-3 《幼児Ⅱ》の因子間の相関パス

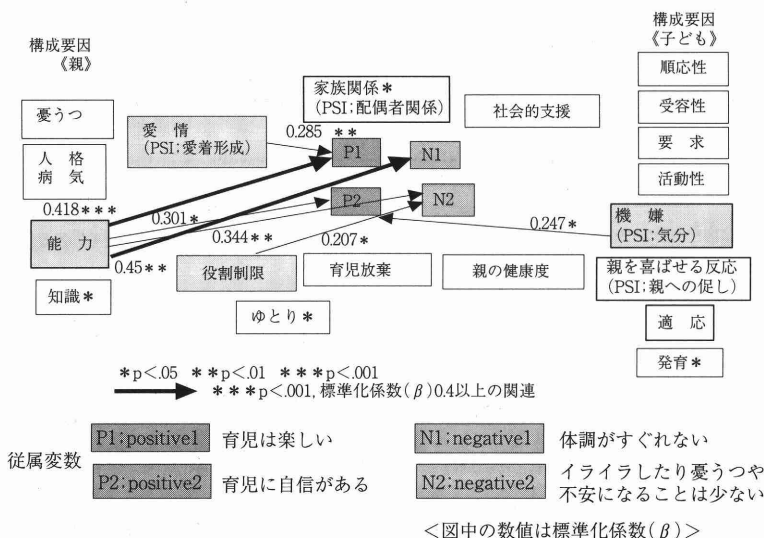


図 3-1 《乳児》の親の感情を従属変数とした重回帰パス

IV. 考 察

1. 児の年齢からみた親子関係のリスクとサポート

Thomas & Chess によると、人は幼児期から継続的に、社会的・課題熟達の必要性に直面しており、ポジティブな適応はある程度のストレスを生じるが、精神的に健康な人はある程度これに耐えられ、何ら防衛的方法に頼る必要はなく、自己の能力—自己評価の感覚を増加する。この場合のストレスは望ましい挑戦であり、新しい体験を付加することになる²⁾と述べてい

る。育児において、望ましい挑戦へと喚起するものは、子どもの反応であり「機嫌」、「適応」や「親を喜ばせる反応」であることが今回の調査結果からも明らかになった。また子どもの年齢段階によって親の感情の葛藤の質が異なることが示された。育児相談や支援の過程においては、一律に応じるのではなくそれぞれの特徴を考慮した対応が望まれる。

今回の調査から、《乳児》から《幼児Ⅰ：1.5～2.4歳》期では、児の成長とともに親の育児の自信が形成され、またその質は確固たるもの

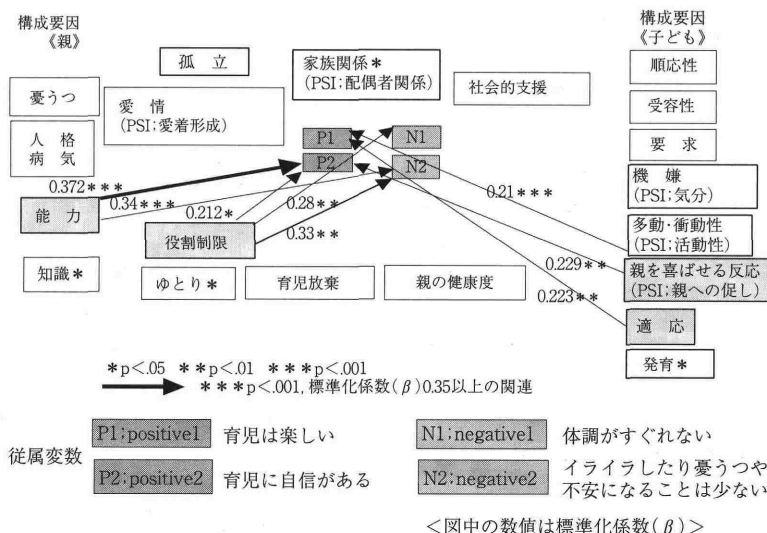


図3-2 《幼児Ⅰ》の親の感情を従属変数とした重回帰パス

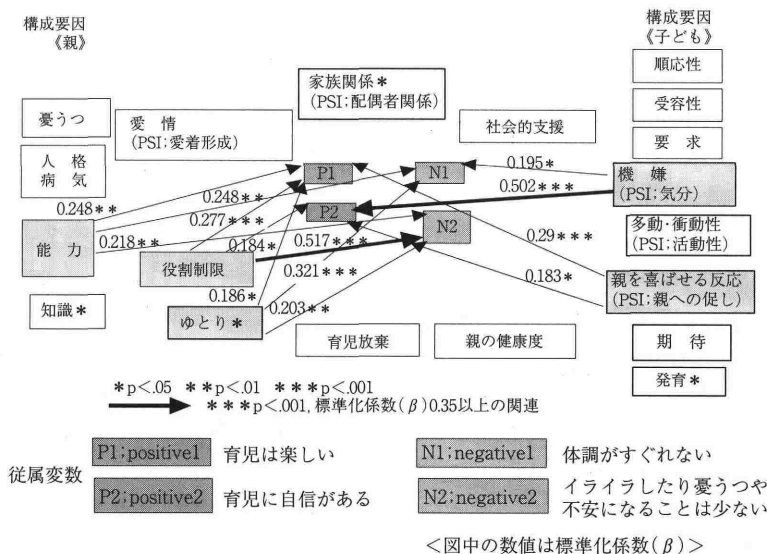


図3-3 《幼児Ⅱ》の親の感情を従属変数とした重回帰パス

ではなく、アンビバレントで揺れやすい質のものであることがわかった。特に《乳児》期では、「親の能力」が親の感情の両面的方向へ寄与を示し「親役割の規制」が「イライラ」にのみ影響し、自信につながるまでに至っていなかった。こうした結果より、育児支援の実際においては、育児教室などで一律に知識を伝えるのみでなく、何ができないのか具体的な育児能力をアセスメントし、当事者（親）とともに考えることで育児に主体性が生まれ、「やらされてい

る感覚」や感情の揺らぎが軽減されるのではないだろうか。

また《乳児》期は実際に親子の密着度の高い時期であり、今後さまざまな託児サービスなどの社会制度の拡充により、親自身の時間的余裕が作られることを期待する。

さらに《幼児Ⅰ：1.5～2.4歳》期では、児の機嫌や親を喜ばせる反応などの要因が親の育児感情に強く影響していた。

杉山ら⁶⁾の被虐待児の調査（2004）において

も、軽度発達障害の存在が被虐待児の53%に認められている。発達障害は、誤った反応を相手(養育者)に伝えてしまうため、親の育児感情を歪ませると考えられる。

栗山、庄司によると、低出生体重児などの周産期ハイリスクを抱える児は、反応の弱さがあり、刺激に反応するが反応が弱く、順応性がなく世話がしづらいと親が感じている⁷⁾。

このように1.5~2.4歳期では児の反応やコミュニケーションスキルが、親の感情に影響することを考慮して、親の訴えのみならず、子どもの気質や機嫌、発達などを丁寧にみていくことで、親—子の関係性を捉えポジティブな感情を伴った育児支援につなげることができると考える。

さらに《幼児Ⅱ：2.5~5歳》においては、養育者の体の不調に「能力」、「ゆとり」に加えて児の要因「機嫌」が寄与し、3歳前後の自我の発達がめざましい児への対処不能感を表していた。児の自我の拡大に伴い、親の心身の疲労感も増すと考えられ、ともすれば相互の関係が悪循環を来しかねないリスクを抱えた時期と考えられる。

PSI理論においては、児の「適応」のストレス得点の高い親は、親役割を形成しづらくさせると結論している¹⁾。特に児の自我が活発になり制止がきかなくなる年齢《幼児Ⅱ：2.5~5歳》では「親役割の規制」が「育児の自信」、「イライラ」の両方に中程度にかかわっていたことから(0.5***), 親の自信を確信する場合にも拘束が強いられている感覚が比較的強くあり、フラストレーションが募りやすい状況にあると考えられる。米国NICHD Early Child Care Research Networkの調査では、子どもの問題行動と、母親のうつ症状、ソーシャルサポートの量、parenting stress、母親の人格の総体、低い結婚の質などの心理社会的リスクとの関連が、24か月よりも36か月の時期に影響が強かった⁹⁾。

以上のことから、特に《幼児Ⅱ：2.5~5歳》では、親自身が現状を克服しようと孤軍奮闘している状態を受け止め、そのうえで自己の能力や自信をどのように捉えているかを把握することが、親子関係のアセスメントに必要であり、怒り—罪の思考循環を早期に断ち切るために有効と考える。

しかし、幼稚園や保育園などの集団に帰属しない期間の幼児と親については、フラストレーションがあってもそれを解消できる場合は少なく、2,3歳児親子は保健医療従事者との接触も乳児期に比べ格段に減り、積極的に把握されにくいと考えられる。今後は子育て支援にかかわる施設などとも連携し、親のニーズを把握する機会の拡充に努めることも重要であろう。

このように、児の気質や行動特徴からくる育児感情に留意し、親の心身の健康問題にアプローチすることが育児支援に必要であり、虐待の一次予防や親子関係の修復に必要であると考えられる。

2. 能力の発達と気質の発達

本研究にオリジナル項目として、仮説的に構成した「発育」については、親の育児感情を表現する従属変数に全く寄与しなかった。これは気質傾向ではなく、能力(何ができるか)を問う項目である。

断言はできないまでも、子どもの「能力」よりも「気質」傾向の方が、乳幼児の親の育児感情に与える影響が大きいのではないだろうか。

個人の気質や認知の様式について、Thomas & Chessらは、知的現象に含まれる「どのような(what)よりはむしろ(how)という側面に関連したもの²⁾」と定義している。「~できる」などの能力とは異なった概念とし、「どのようにするか」ということを測るものである。

小児保健領域においては、健診など、児の「能力」の到達度から発育発達を見極めるのみでなく、気質的な特徴をみていくことで、行動上の問題や親の育児上の悩みに応えられるだろう。

3. 尺度の妥当性および限界と課題

今回PSIをもとに開発した尺度は、因子名の命名や解釈など検討の余地を残しつつも、育児感情を説明する要因が、各年齢群に共通・特異的なものと異なった様相として確認されたことは意義があると考えられる。

また、親の育児感情の要因として「夫や家族」、「孤立」、「期待」、「多動・衝動性」が寄与しなかったが、育児支援センターや保育園に帰属し、親と社会のつながりがあり、発達の問題を抱える児も少ないことなどの対象集団の特性を反映し

た結果と考える。

今後は父親や帰属集団など対象を変えて調査を継続していく必要があると考える。

引用・参考文献

- 1) Abidin, Richard R., Parenting Stress Index, Third Edition, Professional Manual, PAR, Inc.
- 2) Thomas, A. & S. Chess, 林 雅次監訳, 子供の気質と心理的特徴, 星和書店, 1981.
- 3) 戸松玲子, 小林 登他, 児童養護施設で生活する子どもの気質研究, 小児保健研究, 2005;64 (1): 18-25.
- 4) 主任研究者: 小林 登, 平成13年度厚生科学研究(子ども家庭総合研究) 児童虐待及び対策に関する研究, 総括研究報告書, 児童虐待全国調査, I. 虐待発生と対応の実態, 2. 地域調査, 2002.
- 5) 諏澤宏恵, 山田和子, 地域保健における保健機関の児童虐待予防の取り組みと課題—平成13年度「児童虐待及び対策の実態把握に関する研究」調査データより—, 小児保健研究, 2005;64 (5): 699-708.
- 6) 庄司順一, 子どもの気質と発達について, 小児科, Vol.40, No.8, 1999: 995-1000.
- 7) 栗山容子, 庄司順一他, 低出生体重児の気質と母親の意識・感情の発達の変化と相互関連性, 小児保健研究, 2001, 511-518.
- 8) 杉山登志郎, 特集子ども虐待へのケアと支援, そだちの科学, 日本評論社, 2004: 2-9.
- 9) NICHD, Care and Youth Development The Interaction of Child Care and Family Risk in Relation to Child Development at 24 and 36 Months, Child Care and Child Development, The Guilford Press, 2005.
- 10) Piaget, J., 滝沢武久訳, 思考の心理学・発達心理学の6研究, みすず書房, 1999.
- 11) J. ボウルビイ, 作田 勉監訳, ボウルビイ母子関係入門, 星和書店, 1981.
- 12) 武井裕子, 保護者の捉えた幼児の気質的特徴, 川崎医療福祉学会誌, 2001, 179-183.
- 13) David N.J., et al., 編著, 鈴木敦子他訳, 児童虐待防止ハンドブック, 1995, 医学書院.
- 14) 横田俊一郎, 育児不安への対応と母親気質, 周産期医学, Vol.30, No. 1, 2000: 121-125.
- 15) 石井かやの, 子どもから母親への愛着, 小児科臨床, Vol.57, 増刊, 2004: 1281-1286.
- 16) 興石 薫, 新生児から生後4か月までの子どもの気質の安定と母親の育児不安, 小児保健研究, 2002: 61 (3): 482-488.
- 17) 栗山容子, 乳幼児の気質構造の分析, 小児保健研究, 2000: 59 (3): 417-423.
- 18) 奈良間美保, 他, 日本版 Parenting Stress Index の信頼性・妥当性の検討, 小児保健研究, 1999: 58 (5): 610-616.
- 19) 田中克枝, 広瀬たい子, 脳性麻痺児の母子相互作用の検討, 小児保健研究, 2003: 62 (4): 481-488.
- 20) 加藤忠明, 赤ちゃんのコミュニケーション, 周産期医学, Vol.26, No.26, 1996: 51-54.

[Summary]

We conducted questionnaire research for parents in accordance with Parenting Stress Index (PSI), for the purpose of finding relationship among children's temperament development characteristics that influence on parents' emotion relating to child care, parents' health condition and environmental factors. The number of targeted parents was 319, and the questionnaires were separately prepared for several child age groups.

As a result of multiple linear regression analysis selecting dependent variables relating to parenting emotion, we found that, for the group of age 1.5 to 2.4, children's "adaptation" to new environments and persons is significant to good parents' feeling of child care. For the group of 2.5 to 5, lack of parents' ability of child care and of their free time due to work load, etc. as well as children's bad temper significantly affect on parent's bad physical condition. Especially, parents tend to feel inability of child care for 3 year-old children who develop their ego rapidly. This indicates that the parent-child relationship is apt to deteriorate during the period of children's ego development, and that comprehensive assistance for parents and children is necessary in addition to the provisional infant child-care.

[Key words]

PSI, Children's Temperament, Parents' Emotion